

古代造瓦技術の変革－8世紀の備中国を題材にして－

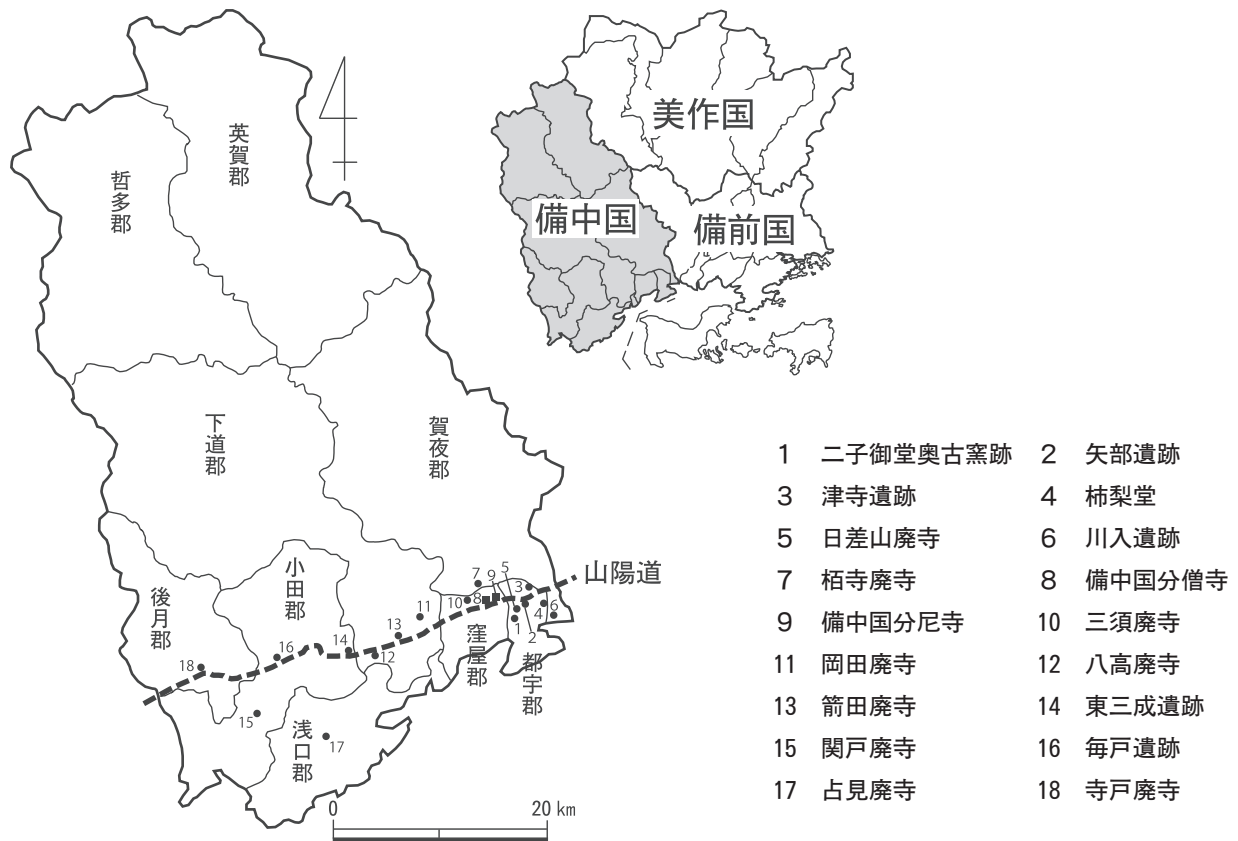
松 尾 佳 子

1 はじめに

6世紀末の造瓦技術伝来以来の変革である、軒丸瓦の横置型一本づくりと軒平瓦・平瓦の一枚づくりは、平城宮・京の造営過程において生み出されたとされる。特に横置型一本づくり軒丸瓦については梶原義実氏の一連の論考（梶原2007・2008・2010・2013・2014・2018）にまとめられ、氏によると「横置型一本づくりおよび平瓦の一枚づくりという技術は、宮都において効率的に大量の瓦を生産するという需要構造に基づいた、技術変革の一環としてとらえることができる。（中略）地方においても、国分寺の造営や国府・駅家等官衙施設瓦葺化に伴う瓦の大量需要に年代的にほぼ伴って波及していく。」とされ、「これら諸技術の地方における展開は、国府や国分寺造営組織の編成過程を明らかにする上でも非常に重要な論

点である⁽¹⁾。」とする。これは8世紀の地方における造瓦変遷を明らかにしていく上で重要な指摘であり、今後は地方毎に深化させ、その詳細を明らかにする必要がある。

岡山県は旧国で備前国・美作国（和銅6（713）年備前国より分国）・備中国の3国にあたる。軒平瓦・平瓦の一枚づくりについては3国共に導入、その後定着すると予想される。一方、軒丸瓦の横置型一本づくりについては、備中国のみに入っていることが明らかとなっている（松尾・妹尾・日浦2019）。どちらの技法も国分寺建立以前に平城宮・京系軒瓦の導入に伴っているものの、導入契機やその後の展開については国ごとに異なり、一様ではない。この差が何に起因しているのか即断することは難しいが、まず前提作業として比較的検討材料が揃っている備中国に焦点を当てて論述したい。またその結論を通し推察できる二・三の事柄について触れておきたい。



第1図 関連遺跡（1/700,000）

2 軒平瓦・平瓦における技術変革

平瓦には、桶といわれる型に粘土を巻きつけ、それを基本4分割して製作する「桶巻づくり」と、凸型台に粘土板を載せて凸面を叩きしめる「一枚づくり」の二通りの製作技法があることはよく知られる（浦林1960、佐原1972）。日本に瓦づくりが伝来した当初は桶巻づくりのみであるが、奈良時代前半に平城宮・京の造営過程の中で一枚づくりが登場すると、それまでの桶巻づくりを圧倒し、奈良時代後半以降は一枚づくりが主流になる（毛利光・花谷1991、岩戸2018）。この流れは県内においても同様で、旧三国ともに概ね8世紀中頃までには一枚づくりへと転換していることが予想される。

備中国における一枚づくり軒平瓦は、二子御堂奥古窯跡（倉敷市二子）（葛原1974・1986a）（以下、二子御堂奥と略称する）で生産された平城宮・京（以下、平城と略称する）6685系が初現となる。平瓦部凹面には明瞭な模骨痕が無く、凸面は縦位縄タキ。幅6cmの段顎（段顎ⅠS）を有し、明瞭な縄タキ痕が顎部や側面に残る。この内、軒平瓦の側面に縄タキを行い、その後未調整のまま残す特徴は、同じく二子御堂奥で生産されている平城6663系に引き継がれている。平城6663系軒平瓦は、平城6225系軒丸瓦とセットで備中国内に伝播するが、その際に側面縄タキを残す技法を用いることが多く、これは隣国の備前国・美作国の平城6663系軒平瓦には無い技法的特徴と言える（松尾2014）。

ここで少し整理をしておくと、二子御堂奥で生産された平城宮・京系軒瓦は、まず平城6313-6685系のセットが生産され、程なくして平城6225-6663系が加わる。いずれの組み合わせも津寺遺跡（岡山市北区津寺【都宇郡官衙関連遺跡】）（亀山・大橋1997）と矢部遺跡（倉敷市矢部【津嶋駅家推定地】）（伊藤1986）へ供給されているので、都宇郡における公的機関の瓦葺化に対応した動きであると推察される。導入時期については二子御堂奥・平城6313-6685系の時期を明らかにする必要がある。平城の年代観によると、平城6313-6685型式は平城宮・京出土瓦編年（以下、平城瓦編年と略称する）の第Ⅱ-1期【養老5（721）年～神亀6（729）年】にあたる。二子御堂奥・平城6685系軒平瓦は、平瓦部が一枚づくりで段顎ⅠSという平城6685型式の製作技法を踏襲している

ものの、瓦当文様に乱れがあることからオリジナルに比べて後出した感がある。また津寺遺跡出土の土器様相からは、官衙関連施設の存続期間が8世紀第2四半期から第3四半期（高畑・中野1998）、あるいは730～750年頃（武田2003）というごく短期間であったとされている⁽²⁾。これらのことから、備中国への一枚づくり軒平瓦・平瓦の導入は遅くとも730年代には開始していたと考えて良い。また、二子御堂奥・平城6685系の製作技法を色濃く残す二子御堂奥・平城6663系は、平城6225-6663系の組み合わせで備中国内に広く分布し、これを起点として一枚づくり軒平瓦・平瓦が国内に拡散、その後基本的には桶巻づくりへ戻ることなく定着すると考える。

3 軒丸瓦に見る技術変革

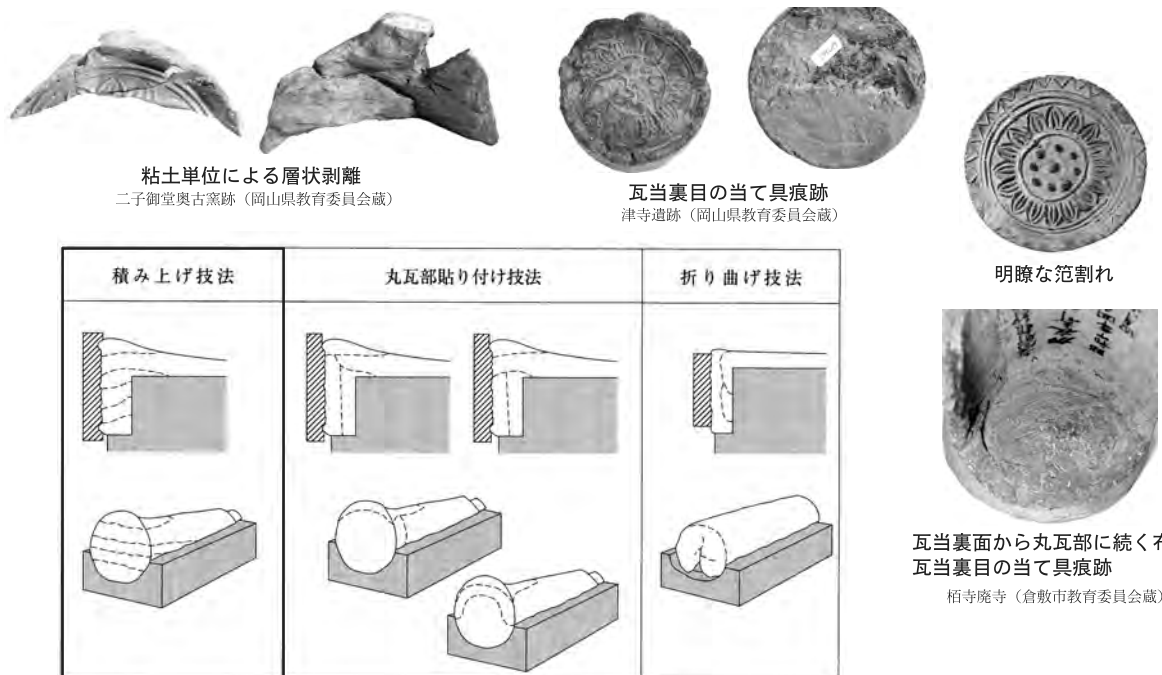
軒丸瓦は、木範に粘土を詰めて成形した瓦当部と、「杵」に粘土を巻き付けて成形し、それを二分割した丸瓦部とを接合して製作するのが一般的である（接合式）。瓦当部と丸瓦部との接合を強固にするため、瓦当裏面に丸瓦接合用の溝をつけたり、丸瓦先端部を加工する例は多く見られる。備中地域におけるいくつかの例をあげると、加茂政所遺跡（岡山市北区）出土、素弁八弁蓮華文（角端点珠）軒丸瓦は、末ノ奥窯跡（総社市宿）で焼成されたものであるが、丸瓦先端凹面側を斜めに切り落とし刻み目を施している（葛原2001）。また秦原廃寺（総社市秦）出土、素弁八弁蓮華文軒丸瓦は丸瓦先端無加工ではあるものの、明瞭な刻み目が見られる（葛原1987a、亀田2000）。そして、7世紀第3四半期から8世紀初頭にかけて備中地域で広まる重弁八弁蓮華文（備中式）軒丸瓦では、出土する遺跡によって多少の違いはあるものの、丸瓦先端を加工して刻み目を施しているものが一定量存在する（妹尾2002・2010）。このように、瓦づくりが当地へ伝わった当初から8世紀初頭までの間、瓦当部と丸瓦部との接合を強固にするための工夫を施しながら、一貫して接合式という技法を使って軒丸瓦は製作されていることが分かる。

この接合式軒丸瓦の弱点（瓦当部と丸瓦部が剥離しやすい）を克服し、大量生産向けに登場したのが横置型一本づくり軒丸瓦である（梶原2010）。成形台を用いて丸瓦部と瓦当部を共土で一気に作り上げるこの技法は、成形台への粘土の詰め方により「積み上げ技法」・「丸瓦部貼り付け技法」・「折り曲げ技法」に細分される（第2図）。

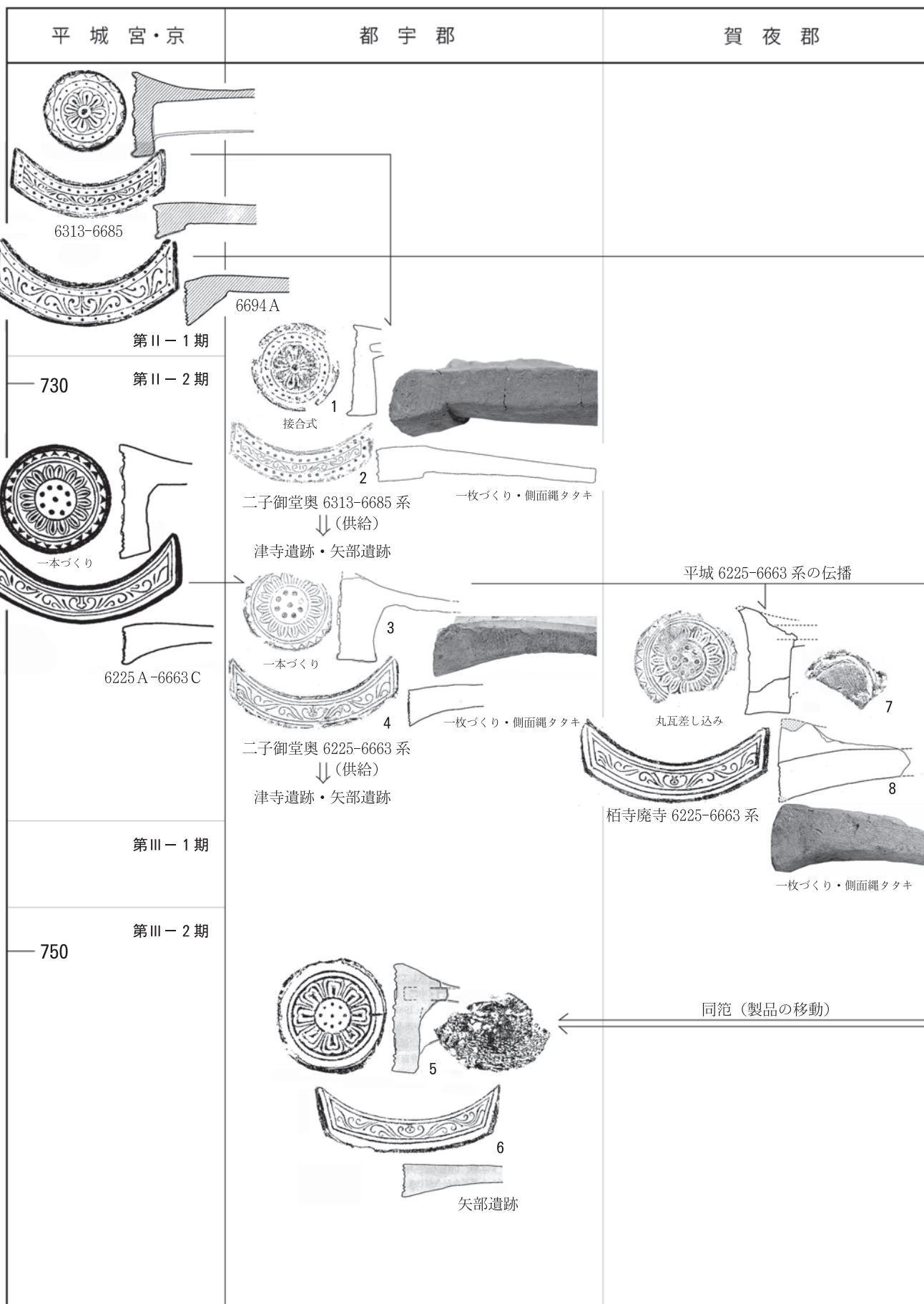
県内では備中国でのみ横置型一本づくりを確認することができ、それは二子御堂奥で生産され、津寺遺跡・矢部遺跡に供給される平城6225系軒丸瓦である。これら3遺跡から出土する平城6225系軒丸瓦は①瓦当部が非常に厚く、②瓦当裏面に布目を残し、中央がやや窪んでいる個体⁽³⁾が若干見られ、③瓦当部の粘土が水平に剥離した資料が存在する、などの特徴から横置型一本づくり積み上げ技法で製作されていることが分かる。このように、当地域では8世紀初頭まで軒丸瓦の製作技法は「接合式」であるが、平城系軒瓦の導入を契機として新来の軒丸瓦製作技法である「横置型一本づくり積み上げ技法」を受け入れたことになる。すなわち、駅家や官衙関連施設などの公的機関の瓦葺化に対応するべく、中央からの新しい技術を受容したのである。その後、この技法は平城6225系の瓦当文と共に備中国内で広まる。ただし、栢寺廃寺⁽⁴⁾（総社市南溝手・賀夜郡）や八高廃寺（倉敷市真備町・下道郡）例を見ると、瓦当部裏面へ丸瓦先端を差し込んだ痕跡を観察することができる。これは瓦当部と丸瓦部を共土で一気に作り上げる一本づくりには見られないものであり、瓦当粘土を水平に積み上げていく過程で、あらかじめ用意しておいた丸瓦を差し込むという部分的な改良が行われた結果と捉えておきたい。つまり、公的機関の瓦葺化に対応するべく導入された「横置型一本づくり積み上げ技法」ではあるが、技法の伝播過程に

おいて改良がなされた結果が栢寺廃寺や八高廃寺例と言える。また備中国における平城6225系の最終段階である毎戸遺跡（矢掛町浅海、小田郡【小田駅家比定地】）例や占見廃寺（浅口市金光町占見、浅口郡）例は接合式で製作されていることから、「横置型一本づくり積み上げ技法」は導入されたもののその後定着することなく、最終的には伝統的な「接合式」に回帰したと推察される。

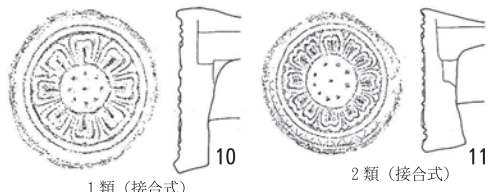
それでは、平城6225系軒丸瓦とその製作技法である横置型一本づくり積み上げ技法は、いつごろ備中国へ導入されたのであろうか。その時期については、①平城宮・京における6225-6663型式の年代観と、②二子御堂奥6313-6685系との生産時期差、この2つの視点から導き出す必要がある。①については、平城6225A（一本づくり）－6663C型式の生産が平城瓦編年第Ⅱ－2期【天平初頭（729）～17（745）年】には開始しているとされる点⁽⁵⁾。②については、二子御堂奥6313-6685系と6225-6663系に文様及び技法的な連続性が認められる（松尾2014）ことから、730年代とした軒平瓦・平瓦の一枚づくり（二子御堂奥6685系）導入の時期と、二子御堂奥6225-6663系の生産開始時期に大きな断絶が見られない点。この2点を重視すると、備中国における平城6225-6663系軒瓦の導入時期については、国分寺造宮勅の出された天平13（741）年より遡る可能性があるとした梶原義実氏の説（梶原2010）を支持することができよう。



第2図 横置型一本づくり軒丸瓦の諸技法（梶原2007）と備中国での諸例（写真 は筆者撮影）



第3図 備中国における8世紀の造瓦変遷

窪屋郡	下道郡・浅口郡・小田郡	製作技術	
		軒丸瓦	軒平・平瓦
 <p>9 三須河原遺跡 6694A</p> <p>平城 6225-6663 系の伝播</p>	<p>挿図出典</p> <p>1 矢部遺跡（出宮ほか1992） 2 二子御堂奥（筆者作図/倉敷市教育委員会蔵） 3 矢部遺跡（筆者作図/倉敷市教育委員会蔵） 4 矢部遺跡（出宮ほか1992） 5・6 矢部遺跡（妹尾2016/個人蔵） 7 栢寺廃寺（筆者作図/倉敷市教育委員会蔵） 8 栢寺廃寺（倉敷市教委1987） 9 三須河原遺跡（武田2003 一部改変） 10～12 備中国分僧寺（出宮ほか1992） 13 八高廃寺（筆者作図/倉敷市教育委員会蔵） 14 八高廃寺（筆者作図/金光図書館蔵） 15・16 毎戸遺跡（大谷猛1974『国鉄井原線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 5 岡山県） 17・18 安藤康宏・岩崎仁司1997『関戸廃寺』笠岡市教育委員会</p>	<p>接合式</p> <p>丸瓦差し込み / 一本づくり</p> <p>一枚づくり</p>	<p>桶巻づくり</p>
<p>平城 6663 系のみ</p> <p>備中国分僧寺・国分尼寺</p>  <p>1 類（接合式） 2 類（接合式）</p> <p>同範（範型・工人の移動）</p>  <p>12</p> <p>6663 系（一枚づくり）</p>	 <p>丸瓦差し込み</p> <p>13</p> <p>14</p> <p>八高廃寺 6625-6663 系</p> <p>一枚づくり・側面縄タタキ</p> <p>15</p> <p>毎戸遺跡・占見廃寺 6625-6663 系</p> <p>接合式</p> <p>16</p> <p>一枚づくり・側面縄タタキ</p> <p>17</p> <p>関戸廃寺</p> <p>18</p>		

（軒瓦は1/8、写真は筆者撮影）

4 小結（第3図）

日本に瓦づくりが伝来して以来、軒丸瓦は「接合式」、平瓦（少し遅れて登場する軒平瓦も）は「桶巻づくり」という技法で基本的に製作されてきた。8世紀になり平城宮・京の造営が急ピッチで進む中で登場した軒丸瓦の「横置型一本づくり」と、軒平瓦・平瓦の「一枚づくり」は、共に増大する瓦需要に伴う効率化を担って登場した造瓦技法とされる。

備中国という一地方国を題材にして、この造瓦技術変革の時期とその導入契機について述べてきた。以下にまとめると、

①軒丸瓦における「横置型一本づくり積み上げ技法」は、国分寺造営勅の出された天平13（741）年以前に平城6225系軒丸瓦の製作技法として導入されるものの、備中国内に広まる過程で改良が行われ、最終的には伝統的な接合式へ回帰する。

②軒平瓦・平瓦の「一枚づくり」は、平城6685系軒平瓦の製作技法と共に730年代に導入され、その後、備中国内で広まる平城6663系軒平瓦と共に拡散し定着する。

③①・②の導入は、都宇郡の官衙や駅家⁽⁶⁾など地方官衙整備に伴う瓦葺化に対応したものと評価できる。

以上3点を明らかにすることができた。8世紀前半に中央の造瓦技術をいち早く取り入れることで、増大する瓦の需要に対応しようとした一地方国の姿が浮かび上がってくる。また、このような状況が都宇郡に隣接する窪屋郡においても確認することができるので、以下に示しておきたい。

5 窪屋郡の状況について

都宇郡内で生産・使用された平城系瓦とは別に、軒平瓦・平瓦一枚づくりへの転換時期にあたる瓦が集中して出土する地域として、都宇郡に西接する窪屋郡三須廃寺周辺をあげることができる（第4図）。三須廃寺は、総社市三須（古代の窪屋郡美箒郷）に位置し、軒瓦の収集と礎石が出土したという伝承のみが残っている。軒丸瓦3型式、軒平瓦2型式が知られており、奈良時代前半から平安時代までの存続期間が推定される（葛原1987b）。なお総社市教育委員会が調査した観音堂遺跡において、三須廃寺の北を区画する溝を確認している（平井2001）。

また、その三須廃寺の東隣りに位置する三須河原遺跡は、総社市教育委員会（武田2003）と岡山県教育委員会（物部2001）による発掘調査が行われている。特に総社市教育委員会が調査した地点では、大形の掘立柱建物群と共に「郡殿」墨書須恵器が出土していることから窪屋郡衙推定地とされ、土器の年代観より715年前後から740年代という存続期間が提示されている。丸・平瓦片に混じり軒平瓦が1点報告されており、平城6694A型式に酷似する⁽⁷⁾。瓦当部の左約1/3のみが残存し、内区文様は均整唐草文で第1単位の主葉より左側が見られる。1条の界線が巡り、外区には珠文が配置される。顎形態は直線顎と思われ、凸面には細かい格子タタキが残る。共伴する平瓦片は、凸面に細かい格子タタキと縦位縄タタキの2種あるが、その大部分を縦位縄タタキが占める。凹面には数個体模骨痕かと思われる資料はあるが、積極的に桶巻づくりと判断されるものはない。同じような様相を呈する瓦群が県教委調査地点でも出土している。いずれも完形の資料はなく、三須廃寺採集資料と同範かと思われる軒丸瓦片と共に、丸・平瓦が出土している。平瓦については、明瞭な模骨痕を残す個体がいくらか存在するものの、多くは凸面縦位縄タタキの一枚づくりで、市教委調査地点の様相とほぼ相違ない。

平城6694A型式は、平城瓦編年第Ⅱ－1期【養老5（721）年～神亀6（729）年】にあたる。平瓦部凹面に模骨痕が残ることから、細板を連結した成形台を用いた「模骨痕を伴う一枚づくり技法」により製作されたもので、平城宮・京における一枚づくり導入期の軒平瓦との位置付けがなされている（岩戸2018）。

以上のような、三須廃寺周辺に集中する一枚づくり導入期にあたる瓦群は何を意味しているのだろうか。近隣（窪屋郡と賀夜郡の郡境域）には、三須中所遺跡から出土した「賀夜」墨書土師器の出土（武田2005）や、井手見延遺跡・金井戸鴻崎遺跡一帯に広がる8～9世紀代の官衙関連遺物（硯・丹塗土師器）・遺構（掘立柱建物・鍛冶工房）の存在が注目される（物部2001）。一方、これら遺跡群に北接する一帯は備中国府推定地（賀夜郡）とされてはいるものの、その所在について確定するまでには至っていない⁽⁸⁾。近年、国府の調査研究ではその実態が「いわゆる方八町に収まるものではなく、東西あるいは南北方向の道路に沿うように多様な施設が立地す



第4図 主要遺跡位置図 (1/60,000)

江見正己ほか2008「南溝手遺跡・窪木遺跡」第498図『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告214』を元に作成

る国府域を形成している」との指摘（金田1995）や、国府の中心である政庁（国庁）には瓦葺建物が採用され、瓦の年代観については国分二寺創建よりも早い8世紀前半代を示す事例が示されている（大橋2013）。いまだ十分な検討材料が揃っているとは言い難い備中国府についてこれ以上踏み込むことは難しいが、上記のような8世紀前半代の瓦の分布状況や、官衙関連遺物・遺構の出土傾向などを広範囲かつ詳細に見ていくことによって、国府の実態解明に寄与することができると確信している（松尾2019）。

6 備中国分二寺の創建（予察）

備中国分僧寺・国分尼寺の創建年代については、昭和46年から47年にかけて県教育委員会により実施された部分的なトレンチ調査の成果と、採集軒瓦を含めた瓦類の提示に依るところが大きい（葛原1986b、葛原1987c、高橋・葛原・松本1991）。ただし正式な報告書が未刊行であることから、トレンチ調査の規模や概要、瓦の出土量とその出土地点などの基礎データについてはほとんど公表されていない。また、寺院の創建や沿革を明らかにするために重要な創建期軒瓦の型式設定については、混乱を生じていることが近年指摘されており、周辺遺跡出土の同範軒瓦と共に妹尾周三氏による再整理がなされている（妹尾2016）。氏によると備中国分僧寺の軒丸瓦は2型式2種、軒平瓦は1型式2種に分けることができ、備中国分尼寺・矢部遺跡・関戸廃寺（笠岡市関戸）の計4遺跡間での変遷が示されている。

備中国分僧寺・国分尼寺の創建期軒平瓦は平城6663系であり、瓦当文様や顎部形状からは、都宇郡の二子御堂奥・平城6663系や賀夜郡の栢寺廃寺・6663系より後出であることが指摘されている（梶原2010、松尾2014、妹尾2016）。また、軒丸瓦については1型式・2型式共に接合式であることから、備中国内で広まる平城6225系が一本づくりから接合式へ回帰した時期に該当する可能性が高い。前述の様に備中国への平城6225-6663系軒瓦の導入時期は天平13（741）年より遡る可能性があり、平城6663系軒平瓦の型式学的な変遷からは、国分二寺創建軒平瓦までの間に連続性が認められる。これらのことから、備中国分寺創建についてはさほど時期を下げる必要はなく、近隣の安芸国分寺（佐竹2002、藤岡・妹尾2011）や

美作国分寺（湊2006）と同様、750年頃には成立していたとすべきであろう。ただし、これはあくまでも現在知られている備中国分二寺の軒瓦を8世紀前半の備中国における軒瓦の様相から見た予察であり、今後更なる調査・研究により多角的に検討することが望まれる。

7 おわりに

備中国を題材に、8世紀における造瓦技術の変革とそこから派生する諸課題について述べてきた。

7世紀後半から爆発的に増加する寺院建立、公的機関の瓦葺化、国分二寺創建、これら未曾有の瓦需要に対応する必要性は備中国のみならず日本全土で急激に高まったとされる。この様な背景の下、平城宮・京の造営過程で生み出された量産型の造瓦技術である「軒平瓦・平瓦の一枚づくり」と「軒丸瓦の横置型一本づくり」が備中国へ導入され、国内での造瓦変遷に大きく影響を及ぼす。ただし、この2つの造瓦技術は同じように波及していくことはなく、軒平瓦・平瓦の一枚づくりが国内で広く定着していく一方、軒丸瓦の横置型一本づくりについては導入後早い段階で改良が行われ、最終的には伝統的な接合式へ回帰していることが分かる。これは、中央からの技術導入に対する地方瓦工人による技術の取捨選択が行われたことを示しているのであろう。

古代建築史の視点から、奈良時代の造営体制に関する中央と地方の関係性について論じた海野聡氏による（海野2015）と、奈良時代の造営を大きく特色付ける要素として大量生産があげられるとし、地方での国府・駅家・国分寺など律令国家に必要な施設の整備においては、中央と類似した新しい造営の枠組みが地方に導入されたとする。また、技術の発展には①外的要因がなく、内部要因によってのみ発展する段階、②交流等によって外的要因を受ける段階、③外的要因を受けて、さらなる内部展開をする段階の3つの形態があると定義づける。

海野氏の指摘に当てはめると、備中国における平城系軒瓦については、地方官衙整備のために導入された大量生産の枠組みの一要素として位置付けることができよう。また技術の発展として見ると、①の段階が、備中国へ瓦づくりが伝わった7世紀初頭から②・③の段階を数度繰り返した後⁽⁹⁾に、7世紀第3四半期から8世紀初頭まで続く備中式軒瓦の展開時期（妹尾2002・2010）を当て

ると、②の段階は中央からの平城系軒瓦製作技術の導入、③の段階はその後の展開に該当する。特に③の段階については、一枚づくりと横置型一本づくりそれぞれの造瓦技術に対する選択の結果が異なる。このことから、地方官衙整備のために編成される造瓦組織の仕組みや新しい技術導入に際しては、中央における最新の情報を取り入れてはいるものの、実際の運用に関しては瓦製作の中心的な立場である地元瓦工人の意向が大きく反映していると言える。

「はじめに」で触れたように、平城系軒瓦は8世紀前半、岡山3国である備前・美作・備中全ての国に導入されてはいるものの、その契機や受け入れた造瓦技術、その後の展開については国毎に異なる（松尾・妹尾・日浦2019）。その理由については明確にしがたいが、平城系軒瓦導入以前の造瓦環境（瓦工人の数や造瓦・造窯技術熟練の度合いなど）、造瓦技術の導入経路（平城宮・京の造瓦所との関係）、導入時期などの差異が反映されている可能性は高い。いずれにせよ、8世紀前半の造瓦変遷を明らかにすることは、地方官衙整備の実態を探るうえで重要な検討課題であり、今後も注視していきたい。

註

- (1) 梶原義実2018より引用・抜粋。
- (2) 津寺遺跡については「備中国風土記逸文」の「新造御宅」にあてる説がある（岡田1992、葛原1991）。天平6（734）年に造り始めたとき（秋本1958）、遺跡の年代観と一致する。
- (3) 瓦当部に瓦範を押し付ける際の補助として、円盤状の当て具が想定されている（前田1995・2018、梶原2018）。
- (4) 栢寺廃寺の平城6225系軒丸瓦には、瓦当部を二分する明瞭な範割れがある。この範割れは、平城6308A型式や平城6229B型式で指摘されているように、横置きの成形台上で瓦当面に範を打ち込む際の衝撃により生じた可能性がある（林2017・岩戸2019）。
- (5) 連弁の先端が尖る二子御堂奥6225系は、平城6225A型式の瓦当文を模している（梶原2010）。平城6225A型式は一本づくりから接合式へ製作技法が変化し、一本づくりのものが二条大路木簡（天平12（740）年）に伴うことが明らかになっている（石田2017）。
- (6) 津嶋駅家は国府に最も近く、国府津が所在する臨海部に位置することから、備中国内で最も重要視された駅家であろう。

- (7) 武田2003所収 P82 第111図698。平城の瓦型式については清野孝之氏（奈良文化財研究所）にご教示いただいた。ただし資料の実見が叶わず同範等の確認はできていない。
- (8) 『和名抄』（池辺1981）に「国府在賀陽郡」とあり、総社市金井戸一帯の小字名（国府・北国府・御所・南国府など）により推定されている（高橋・葛原・松本1991）。また、土器を中心とした遺物（畿内産土師器や回転へう磨き須恵器、緑釉陶器など）の集中から総社宮周辺を推定地とする意見（武田2003）、総社宮の北に位置する神明遺跡（総社市福井）周辺の地割や遺跡の特徴から、同遺跡を国府の西北（戌亥）に位置する宗教施設に比定する意見（柴田2019）がある。
- (9) 7・8世紀吉備地域の瓦については、「畿内主流派」・「畿内非主流派」があり、複数の伝播経路（畿内経由、直通、地方経由）の存在が提示されている（亀田2006）。

参考・引用文献

- 秋本吉郎校注1958『風土記』『日本古典文学大系2』岩波書店
- 池辺 彌1981『和名類聚郡郷駅名考証』吉川弘文館
- 石田由紀子2017「平城宮の6225-6663型式軒瓦」『古代瓦研究』VII 奈良文化財研究所
- 伊藤 晃1986「矢部遺跡」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県
- 岩戸晶子2018「大和の一本づくり・一枚づくり—平城宮・京の出土資料を中心に」『第18回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅦ—一本づくり・一枚づくりの展開1』奈良文化財研究所
- 岩戸晶子2019「大和の一本づくり・一枚づくり—平城宮・京の出土資料を中心に」『第19回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧ—一本づくり・一枚づくりの展開2』奈良文化財研究所
- 浦林亮次1960「瓦の歴史—法隆寺遺瓦群における技術史的試論」『建築史研究28』建築史研究会
- 海野 聡2015『奈良時代建築の造営体制と維持管理』吉川弘文館
- 大橋泰夫2013「国分寺と官衙」『国分寺の創建 組織・技術編』吉川弘文館
- 岡田 博1992「官衙」『吉備の考古学的研究（下）』山陽新聞社
- 亀山行雄・大橋雅也編1997「津寺遺跡4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』116 岡山県教育委員会
- 梶原義実2007「尾張・三河地域における奈良時代の古瓦」『愛知県史研究』第11号 愛知県
- 梶原義実2008「横置型一本作り軒丸瓦の諸技法とその年代」

『名古屋大学文学部研究論集161』名古屋大学文学部

梶原義実2010『国分寺瓦の研究』名古屋大学出版会

梶原義実2013「国分寺と造瓦」『国分寺の創建—組織・技術編』吉川弘文館

梶原義実2014「古代日本における造瓦技術の変遷」『考古学ジャーナル』652 ニュー・サイエンス社

梶原義実2018「一本づくり・一枚づくりに関する諸問題」『第18回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅦ—一本づくり・一枚づくりの展開1』奈良文化財研究所

亀田修一2000「13中国四国地方の高句麗系軒丸瓦」『古代瓦研究会シンポジウム記録 古代瓦研究Ⅰ』奈良国立文化財研究所

亀田修一2006『日韓古代瓦の研究』吉川弘文館

金田章裕1995「国府の形態と構造について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集 国立歴史民俗博物館

葛原克人1974「第Ⅴ部 二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2 岡山県教育委員会

葛原克人1986a「二子御堂奥古窯址群」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県

葛原克人1986b「備中国分僧寺」『岡山県史』第18巻考古資料 岡山県

葛原克人1987a「秦原廃寺」『総社市史考古資料編』総社市

葛原克人1987b「三須廃寺」『総社市史考古資料編』総社市

葛原克人1987c「備中国分僧寺跡」『総社市史考古資料編』総社市

葛原克人1991「国府と官衙」『岡山県史原始・古代Ⅰ』岡山県

葛原克人2001「吉備出土の角端点珠瓦」『岡山県立博物館研究報告』21 岡山県立博物館

倉敷市教育委員会1987『板谷コレクション図録（瓦編）』

佐竹 昭2002「安芸国分寺跡451号土坑出土の木簡について」『史跡安芸国分寺跡発掘調査報告Ⅳ』財団法人東広島市教育文化財振興事業団

佐原 眞1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学協会

柴田英樹2019「第13節 神明遺跡の地割と地理的性格」「神明遺跡 刑部遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』249 岡山県教育委員会

妹尾周三2002「造瓦工人与寺院の造営—備中式軒丸瓦の検討—」『考古学研究』193 考古学研究会

妹尾周三2010「8備中の重弁蓮華文軒丸瓦—備中式を中心に—」『古代瓦研究会シンポジウム記録 古代瓦研究Ⅴ』奈良文化財研究所

妹尾周三2016「軒瓦から見た備中国分寺の造営過程」『古文化談叢』第77集 九州古文化研究所

高橋 護・葛原克人・松本和男1991「備中」角田文衛編『新修国分寺の研究』第四巻 吉川弘文館

高畑知功・中野雅美編1998「津寺遺跡5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』127 岡山県教育委員会

武田恭彰2003「三須河原遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』16 総社市教育委員会

武田恭彰2005「平成14・15年度 東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』14 総社市教育委員会

出宮徳尚1992「集成17 瓦当文」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社出版局

林 正憲2017「平城京の飛雲文軒瓦」『8世紀の瓦づくりⅥ—飛雲文軒瓦の展開1』奈良文化財研究所

平井典子2001「東総社中原本線改良事業に伴う発掘調査（三須地区）」『総社市埋蔵文化財調査年報』11 総社市教育委員会

藤岡孝司・妹尾周三2011「安芸国分寺（発掘調査の成果）」『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館

前田清彦1995「三河国分寺系軒丸瓦をめぐる—一成形台一本造り軒丸瓦の変遷とその系譜—」『三河考古』第8号 三河考古学談話会

前田清彦2018「東海地方東部の一本づくり・一枚づくり」『第18回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅦ—一本づくり・一枚づくりの展開1』奈良文化財研究所

松尾佳子2014「備中における平城宮系軒瓦の導入と展開」『古事』第18冊 天理大学考古学研究室

松尾佳子2017「中国地方（山陽地域）の6225-6663系軒瓦」『古代瓦研究』Ⅶ 奈良文化財研究所

松尾佳子・妹尾周三・日浦裕子2019「山陽地域の一本書くり・一枚づくり」『第19回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧ—一本づくり・一枚づくりの展開2』奈良文化財研究所

松尾佳子2019「古代の瓦について」「神明遺跡 刑部遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』249 岡山県教育委員会

湊 哲夫2006「第6章 国分寺の成立と展開」『吉備の古代寺院』吉備考古ライブラリー13 吉備人出版

毛利光俊彦・花谷 浩1991「屋瓦」『平城宮発掘調査報告』ⅩⅢ 奈良国立文化財研究所

物部茂樹ほか2001「岡谷大溝散布地ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』156 岡山県教育委員会